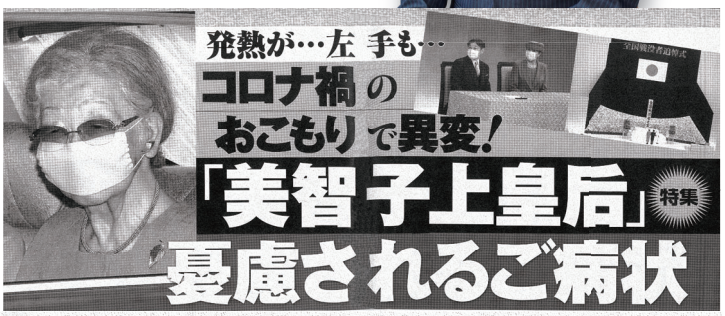
週刊新潮　2020年9月24日秋風月増大号

あいちせぼね病院

院長　伊藤全哉

監修記事



発熱が…左 手も…

コロナ禍のおこもりで異変！「美智子上皇后」特集

憂慮されるご病状

ご公務が軒並み取り止めの天皇皇后両陛下を始め、皇室のご活動にもコロナは多大な影響を及ぼしている。中でも美智子上皇后には長らくの「おこもり」でご体調に異変がみられるという。それは公表された紀子妃の眞子さまに関わる「ご回答」とも無関係ではなく……。

「薄いサングラスにマスク姿でしたが、随分とお痩せになったように見受けられました。何しろ昨年5月の御代替わり頃から体重が激減し、現在も元の状態には戻られていないというのです」

そう話すのは宮内庁担当記者である。上皇后さまは今月11日、検診のため高輪の聖心会卸所をご出発、宮内庁病院へと向かわれた。

「皇居内の生物学研究所に通われる上皇さまとご一緒に、皇居に入られました。美智子さまの外出は、4月に宮内庁病院の歯科にかかられて以来およそ5カ月ぶり。ご夫妻ご一緒の外出は、3月末に高輪に移られてから初めてのことでした」(同)

ご夫妻を乗せた車は、研究所を経由して宮内庁病院に。上皇后さまは、昨年手術した白内障や乳がんの術後検査などを受け、およそ5時間後に皇居を後にされた。

振り返ればこの十余年、上皇后さまは絶えずお体の変調に苛まれてこられた。その姿はまさしく「満身創痍」というほかなく、

「御代替わりの翌月、美智子さまは血液検査で、心機能が低下すると分泌されるホルモンの数値が高いことが判明しました。その後の心臓検査でも、心臓の弁が完全に閉じずに血液の逆流や不整脈が続いているという診断を受けています」(同)

これに先立つ2015年には、心電図検査で冠動脈に狭窄が見つかり、心筋の血流が悪くなる「心筋虚血」と診断されている。また、

「心臓の異変が見つかった直後、昨年6月には両眼の白内障の手術を受けておられます。かねて美智子さまはものが見えづらい症状を訴えられていたのですが〝御代替わりを迎えるまでは陛下を支えたい〟とのお気持ちが強く、手術を先延ばしになさっていたのです」(同)

さらに昨年8月、先々の懸念となりかねない〝病状〟が宮内庁から発表された。

「定期健診のエコー検査で左胸乳腺に腫瘤が見つかり、MRI検査の結果、悪性が疑われる所見がみられました。あらためて組織検査を行なったところ、早期の乳がんと診断されたのです。9月に入って東大病院で1㌢弱の腫瘍摘出手術を受けられましたが、幸いリンパ節への転移もなく、術前と同じステージ1と診断されました。現在は、ホルモン療法が続いています」(同)

前述の通り、敷地面積が皇居の50分の1という高輪へご夫妻が移られたのは3月末。現在は朝と夕、ご一緒に庭を散策されているというのだが、

「実は体重の減少とともに、お引っ越しの直後から原因不明の微熱が続いています。当初は、お荷物の仕分けなどで朝から夜遅くまで根を詰めて作業されたことで、お疲れがたまったのではとみられたのですが、そうした状態が、かれこれ4カ月も治らないのです」(同)

朝方は平熱であるものの、昼を過ぎると37度台まで上昇、就寝されると翌朝は下がっているといい、これが連日続いているのだが、先の記者は、

「上皇職は『ストレスが原因で熱が出るとは言いきれない』などとして『原因はわからない』を繰り返していますが、美智子さまは実に5カ月もの間、外出なさっていない。その間、予定されていた那須御用邸でのご静養は見送られ、中止となったこともあり、やはり恒例だった軽井沢と草津での

ご静養も取り止めとなってしまったのです」

いずれも〝県をまたぐ移動〟への懸念が生じたことが一因だったという。長年積み重ねてこられたご公務が一時離れ、ようやくご自身のセカンドキャリアを迎えられようとした矢先、襲い掛かったコロナ禍。とはいえ、自粛ムードばかりが先行して貴重な外出の機会が奪われ、かえって心身の健康を損ねてしまわれたのだとしたら、まさに本末転倒である。

左手の感覚も原因不明

記者が続けて、

「数カ月間の微熱に加え、美智子さまには現在、左手の指に違和感があるというのです。上皇職によれば『こわばり』という表現を用いて、指が曲がらなくなったり物が持てなくなったりするわけではないものの、ご高齢で様々な症状が現れるとのことでした」

こちらも原因は不明だといい、

「美智子さまは最近、趣味のピアノをお弾きになっていない。それも指の症状が影響しているのではないかというのです。せっかく手に入れられた、ご自身の時間〟が、こうしたご不調でふいになるのはさぞお辛いことでしょう」(同)

上皇后さまは05年から頸椎症に罹られ、11年には「頸椎症性神経根症」と診断されている。首から左肩、左腕にかけて痛みやしびれが認められ、腰痛を併発なさることもあった。宮内庁関係者によれば、

「それ以降、激しい痛みのために『みどりの式典』や文楽鑑賞などの行事を欠席されることもありました。また、痛みによってお声を出すのが辛い時もあり、筆談でやり取りなさることもあったのです」

長らく苛まれてきた持病と、今回の〝手指のこわばり〟とは関係があるのだろうか。「あいちせぼね病院」の伊藤全哉院長に聞くと、

「頸椎症性神経根症は、首から手の先まで延びている神経根が圧迫されて症状が出る病気ですが、手指の『しびれ』でなく『こわばり』というのは、首からの病気より他の原因が疑われます」

とのことで、

「まず一般的に疑うのはリウマチです。ご存知の通り節々が炎症を起こして変形してしまう病気で、微熱を伴うこともあります。血液検査で判明しますが、発症する多くは30～50代の女性。ほかに鍵鞘炎の一種で、指を曲げて伸ばす時に引っかかる『ばね指』や、手首の部分を縦に走る正中神経が圧迫される『手根管症候群』という病気もあります。この症状では手がしびれ、そのしびれをこわばりと感じることもあるのです」(同)

上皇后さまは今後、上皇さまが生物学研究所へ通われる日に合わせ、週に一度のペースで宮内庁病院を訪れ、定期的な検査も含めて受診なさる予定だという。

「上皇さまは現在、ご専門のハゼに関する論文を仕上げるために週2回、研究所に赴かれています。その間、美智子さまはもっぱら高輪で読書や、届いたお手紙に目を通したりして過ごされてきました。コロナ禍が深刻化する前は、上皇さまが研究所においての際にご夫妻で東御苑を散策なさっては、などと上皇職も案を練っていたのですが、それも叶わなくなってしまった。美智子さまは、高輪の仮御所では上皇さまのお世話に専念なさる一方で、コロナが収束するまで外出は控える〟との一貫したお考えを持たれ、在宅に徹してこられたのです」(前出・関係者)

とはいえ、おこもりが長期間にわたれば不具合もあろう。老年精神医学が専門の和田秀樹医師は、

「感情をコントロールし、気持ちを安定させる働きのある神経伝達物質の『セロトニン』は、日光に当たることで分泌が促されます。ご高齢の方の外出機会が減ることは、決して好ましくありません」

そう指摘しながら、

「微熱が続く状態も、精神的なストレスによる可能性はあります。体温調節や発汗など様々な機能の調整を担う自律神経は、ストレスで失調するケースもあるのです」

紀子妃はお誕生日のご回答で……

〝海の王子〟への不信感

ご体調とストレスとは、かように不可分である。30年にわたり担ってこられた国母というお立場を離れた途端、お住まいを始め環境は一変。その上、好まれていた外出もままならないとなれば、平穏な暮らしの中に一抹の澱が沈殿するのも道理だ。さらに、平成から令和をまたいで横たわる「難題」もまた、上皇后さまのお悩みの種であるのは論を俟たない――。

「美智子さまが5カ月ぶりに外出なさった11日は、紀子さまの54歳のお誕生日でもありました」

とは先の記者。これに先立ち紀子妃は、記者会に文書で回答され、そこでは、〈眞子さまと小室圭さんの結婚に関する行事が延期されてから2年半が過ぎました。(中略)現状や見通しについてはいかがでしょうか〉

との問いに対し、

〈親として娘の気持ちを受け止め、一緒に考えていくことが大切だと考えています。(中略)長女の気持ちを尊重したいと思っております〉

そう綴られていたのだ。

「昨年のご回答では『長女の気持ちを推測するなどして現状や今後についてお伝えすることは、控えたい』とだけ述べられていたので、今回は事実上の〝容認〟ではないかと捉えるむきもあります。しかしそれは早合点です。そもそも秋篠宮さまが一昨年のお誕生日会見で述べられた『多くの人が喜んでくれる状況にならない』とのお言葉がすべての〝縛り〟となっている。現在は誰の目にも明らかです」(同)

となれば、

「それでも眞子さまのお気持ちを『できる限り尊重する』のであれば、納采の儀を経ずに眞子さまが皇籍離脱され、一般人になられたのち小室さんと一緒になるという方法を後押しする以外にありません」(同)

が、そんな〝非常手段〟を上皇后さまが喜ばれるはずもない。先の関係者が明かすには、

「眞子さまは、美智子さまにとって大切な初孫です。幼い頃から生真面目な性格を讃えておられ、先々も皇室に残ってご公務の意義と向き合い、いっそう邁進してほしいとの思いを寄せておられました。ところが、小室さんの出現ですべて水泡に帰してしまった。そもそも美智子さまは最初から、小室さんが誠実さを持ち合わせているのか、大いに訝しんでおられたのです」

そのお考えは、17年9月の婚約内定会見を迎えてもなお変わることがなく、

「小室さんの母親の借金トラブルが露見し、18年2月には結婚が〝2年延期〟と発表されました。ところが、小室さんは説明を尽くさずにさっさと渡米。その姿に、美智子さまは不信感を募らせていかれたのです」(同)

小室さんは現在、フォーダム大で留学3年目。すでに秋学期の講義が始まっており、今後はニューヨーク州の司法試験を受験するとみられるが、帰国の可能性ともども、不透明のままである。

「2年前、突然に小室さんが留学すると分かって美智子さまも驚いたご様子でしたが、その後は一度も帰国せず、いまだ説明を果たさないまま。今年に入っても美智子さまは『生活が成り立たないような方と、眞子さまは一緒になれるのでしょうか』と周囲に漏らしておられました」(同)

霧消しないお悩みにコロナ禍が輪をかける。美智子上皇后の御体が軋むのもむべなるかな、事態は混迷の一途である。

京都
創業天明元年（1781年）
石野の白味噌
大
株式会社 石野味噌
京都市下京区浦小路通四条下ル七百禅町 ☎(075) 361-2336
http://www.ishinomiso.co.jp
お買い求めは西賀茂、食料品店にて